

# 作業療法学科の先生からのおすすめ図書紹介



池谷 政直 先生

書名	著者名	出版社	ページ数
	請求記号		
<a href="#">HSPサラリーマン：人に疲れやすい僕が、 楽しく働けるようになったワケ</a>	春明力	Clover出版	318p
	S9/21468		
<b>先生からの推薦文</b> <p>「HSP」という言葉を聞いたことはありますか。HSPは、米国の心理学者であるエレイン・N・アーロン博士が提唱した心理学的概念で、神経が細やかで感受性が強い性質を生まれ持った人のことです。 対人援助職という仕事をしている私ですが、決してメンタルは強くありません。数年前、私は傷つきやすく脆い性格の自分を直したいという想いからこの本を手に取りました。しかし、この本は「直す」からどう「活かす」かに価値観を変えるきっかけとなりました。 情報があふれ刺激の多い社会で生きるなかで、気疲れや生きづらさを感じている人は少なくないでしょう。それが自分だった場合も含め、心のスタンスを再構築し幸せになるために関わる人々には何ができるのでしょうか。 この本には、当たり前なことだけど大切なことが詰まっています。 読んで感じたことがあったら、是非私にも教えてください。それが私の気づきにもなるのであろうと思っています。</p>			
<a href="#">嫌われる勇氣 (自己啓発の源流「アドラー」の 教え:[1])</a>	岸見一郎, 古賀史健	ダイヤモンド社	294p
	S1/12396		
どうすれば人は幸せに生きることができるかという哲学的な問いに、きわめてシンプルかつ具体的な答えを提示する「アルフレッド・アドラーの思想(アドラー心理学)」について、青年と哲人の対話形式を用いてまとめる。			
<a href="#">こんな夜更けにバナナかよ：筋ジス・ 鹿野靖明とボランティアたち ＜読書感想文コンクール課題図書＞</a>	渡辺一史	文藝春秋	558p
	S9/18992		
ボランティアの現場、そこは「戦場」だった——自分のことを自分でできない生き方には、尊厳がないのだろうか？ 介護・福祉の現場で読み継がれる傑作ノンフィクション！			
<a href="#">知ることより考えること</a>	池田晶子	新潮社	175p
	S1/21467		
インターネットなんか知らない。もし本当を知りたいのなら、考えることだ-。ほんの少し「自分」を変えてみるために役立つ「哲学」を、日常の言葉でやさしく語る。			
<a href="#">臨床家がなぜ研究をするのか：精神科医が 20年の研究の足跡を振り返るとき</a>	糸川昌成	星和書店	239p
	493.76/29		
偶然と直観の作用する状況に挑戦するなかでこそ、低い確率でしか起こりえない貴重な体験が訪れる-。あすへの希望を信じて統合失調症の解明にいとむ精神科臨床医が、研究をすることの内実を具体的に語る。			



## 伊藤 真美 先生

<a href="#">高齢者のための在宅活動ガイド： HEPOP--疾患別運動・活動のススメ： 楽しく続ける運動メニュー72選</a>	国立長寿医療研究センター・在宅 活動ガイド作成委員会	国立長寿医療研究セン ター	223p
	493.185/42		
<b>先生からの推薦文</b> <p>日本は、世界の中で最も高齢化の進んだ国である。多くの高齢者が、様々な疾患を持ちながらも活動的な社会生活を送るために日々努力している。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、高齢者の社会参加の機会が減り、活動量が低下することによって起こる「フレイル」が大きな問題となっている。本書は、特にリハビリテーション領域で関わることの多い疾患について、病態に関する説明だけでなく、実際の運動の方法や運動の注意点について、イラストを多く取り入れてわかりやすく解説している。さらに、実際の臨床場面での工夫や感染対策、コラムなども掲載されており、臨床実習やその後の臨床家になった後にも十分に活用できる本である。</p>			
<a href="#">サルコペニア・フレイル指導士テキスト： 日本サルコペニア・フレイル学会認定</a>	日本サルコペニア・フレイル学会	新興医学出版社	143p
	493.185/14		
<p>本書は日本サルコペニア・フレイル学会認定の初の公式テキストであり、ロコモティブシンドローム やオーラルフレイルの概念から、高齢者の機能評価、運動・栄養指導、薬物など、専門的知識から実践までを網羅したバイブルである。また、老後を元気に過ごすために、どんな運動や食事が大切かを学びたい熱心な方へも届けたい1冊。</p>			

## 今井 あい子 先生

<a href="#">博士の愛した数式</a>	小川洋子	新潮社	291p
	S9/7894		
<b>先生からの推薦文</b> <p>ストーリーは、事故により80分しか記憶を維持することができなくなった老数学者とその家政婦を中心としたお話です。数学の奥深さ、数式のもつ秘密めいた美しさ、文章表現が繊細で引き込まれます。また、ストーリーのみでなく、医療専門職の立場からは、記憶障害を有して生きていくことの大変さや悲しみを主人公の心情を通して感じることができます。比較的短いお話ですので、通学時間のお供にぜひ。</p>			
<a href="#">忘れても、しあわせ</a>	小菅もと子	日本評論社	259p
	916/65		
<p>さまざまな痴呆の症状にとまどいながらも、ついには痴呆を受け入れ、理解しあうおだやかな日々へ。70年ぶりに持った絵筆で個展を開くまでになったマサ子はあちゃんと家族の3年間を、一家の主婦がありのままにつづった介護日誌。ありのまま痴呆と向きあう。</p>			
<a href="#">死ぬ瞬間：死とその過程について, 改版</a>	エリザベス・キューブ ラー・ロス著/鈴木晶訳	中央公論新社	467p
	146/721		
<p>死とは、長い過程であって特定の瞬間ではない。人生の最終段階までに現れる、否認と孤立・怒り・取り引き・抑鬱・受容、そして希望。二百人に及ぶ末期患者への直接面接取材で、死に至る人間の心の動きをさぐり、家族、病院関係者が、患者の暗黙の訴えと向き合うきっかけとなった、画期的名著。</p>			
<a href="#">くじけないで</a>	柴田トヨ	飛鳥新社	253p
	S9/22567		
<p>90歳を過ぎてから詩を書き始めた著者の、2010年に98歳で発表した処女詩集「くじけないで」、第2詩集「百歳」、そして2013年1月に亡くなるまでに書かれた未発表作品を収録する。</p>			
<a href="#">認知症世界の歩き方：認知症のある人の 頭の中をのぞいてみたら？</a>	寛裕介	ライツ社	264p
	S4/22590		
<p>なかなか理解してもらえずに困っていた「認知症のある方が実際に見ている世界」が、スケッチと旅行記の形式で、すごーくわかる!まるで「ご本人の頭の中を覗いているような感覚」で、認知症のことを楽しみながら学べる一冊です。</p>			
<a href="#">障害受容再考：「障害受容」から 「障害との自由」へ</a>	田島明子	三輪書店	212p
	494.78/228		
<p>リハビリテーションは人の何を支援しようとしているのか。障害の意味に正面から向き合い、リハビリテーションの新たな地平を問う。『地域リハビリテーション』連載に加筆し書籍化。</p>			

木村 大介 先生

<a href="#">PT・OT・STのための 臨床5年目までに知っておきたい予後予測の考えかた</a>	竹林崇	医学書院	320p
	494.78/224		
<b>先生からの推薦文</b> 作業療法の臨床場面では「予後予測」が非常に重要なテーマとなります。経験則に頼りがちな「予後予測」について、これまでに蓄積された予後予測の研究結果から数多くの方法を、疾患別に網羅的に提供している本書は一見の価値があると思います。			
<a href="#">上肢運動障害の作業療法：麻痺手に対する作業運動学と作業治療学の実践</a>	竹林崇	文光堂	204p
	493.73/145		
脳卒中後の麻痺手に対するCI療法を中心としたアプローチ方法を豊富な図表と科学的根拠をもとにレクチャー。実施するための具体的な評価法、実践的な課題指向型アプローチにおける課題の作成方法と膨大な数の課題一覧表を記載し、初学者でも方法論を理解できるような構成となっている。			
<a href="#">作業で紡ぐ上肢機能アプローチ：作業療法における行動変容を導く機能練習の考えかた</a>	竹林崇編集	医学書院	202p
	493.73/168		
上肢への作業療法アプローチのエビデンスを学べる！臨床で活かせる！「作業に焦点を当てた上肢機能アプローチ」を行う必要性が謳われている昨今、本書は数多ある脳卒中後の上肢機能アプローチの手法を幅広く紹介するとともに、各々のアプローチに対するevidence based practice (EBP) についてまとめている。また、これらのアプローチの実践という観点から、EBPに根ざした多様な事例報告を収載。エビデンスに基づいた「対象者中心の作業療法」を実現するための1冊。			
<a href="#">Evidence Basedで考える認知症リハビリテーション</a>	田平隆行, 田中寛之編集	医学書院	302p
	493.75/16		
認知症のリハビリテーションが医療現場に浸透するなか、以前にも増して、根拠に基づいた評価や介入の実施がセラピストに求められている。そこで本書では、エビデンスがあり、かつ、適応と限界、アウトカムとの関連が明確に示されている最新の認知症リハビリテーションの評価法、介入法を、先行研究を踏まえて紹介している。さまざまな時期・場所における介入戦略の実例も豊富に提示、「臨床」と「研究」をつなぐための1冊。			
<a href="#">子どもの「できた!」を支援するCO-OPアプローチ：認知ストラテジーを用いた作業遂行の問題解決法</a>	ヘレン・J・ボラタイコ, アンジェラ・マンディッチ著；古賀祥子訳	金子書房	181p
	493.937/78		
着替えや食事、学校での学習や友だちとの遊びなど、日常生活における様々な場面で、いわゆる「不器用さ」や「運動の苦手さ」によって苦戦している子どものために、カナダで開発された画期的な支援法がCO-OP（コップ）アプローチです。CO-OPでは、子どもが自分で目標を設定し、解決策を発見することでスキルを習得できるよう導いていきます。本書は、開発者のボラタイコ博士による、基本理解から介入の進め方、事例までを網羅したCO-OPの包括的ガイドです。			

竹田 徳則 先生

<a href="#">マスクを外す日のために：今から始める、ウィズコロナの健やかな生き方</a>	和田秀樹	幻冬舎	177p
	S4/22652		
<b>先生からの推薦文</b> 2020年からは、新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴いマスクの着用が当たり前の生活となり今日に至っています。ところが、マスク着用のデメリットやコロナ禍での自粛生活による健康への悪影響を説明できる人は意外に少ないのではないのでしょうか。本書では、例えばマスクを着用し続けていると二酸化炭素多めで酸素少なめの空気を吸い続けることになり、頭痛が起こりやすくなる機序が分かりやすく説明されています。また、自律神経系への悪影響や循環器系への負担が分かりやすくなることなどが、理解しやすい平易な文章で書かれています。さらにコロナ禍での免疫力を高める生活の有り様や体と脳と心を健康に保つ情報もふんだんに掲載されています。リハビリテーション専門職を目指す皆さんには、コロナ禍での生活や健康を考えるために自身のためにもご家族のためにも一読して欲しい一冊です。			

中西 康祐 先生

<a href="#">ぼくらはみんな生きている： 18歳ですべての記憶を失くした青年の手記</a>	坪倉優介	幻冬舎	218p
	916/63		
<b>先生からの推薦文</b> 大学に入学したばかりの著者がバイク事故で救急搬送された。病院のベッドで目覚めると、家族や友人、恋人のことだけでなく、どうやって食べるのか、寝るのか、トイレに行くことさえも忘れていた。交通事故により頭部を強打したことによる記憶障害。18歳で人生をゼロから始めることになった青年が書いたありのままの手記。二度と戻らない記憶。あたらしい自分と向き合いながら生きて、草木染職人として独立するまでの12年間の軌跡を描いています。 著者は皆さんと同じように大学生生活を送ろうとしていたひとりの大学生でした。リハビリテーションの一翼を担う作業療法士は、このように残念ながら障害を負った人に寄り添い、二人三脚でしあわせな人生を再構築するお手伝いができる医療専門職です。そうした視点で一読すると、リハビリテーションの魅力や奥深さも追体験できるかもしれません。			
<a href="#">新しいリハビリテーション：人間「復権」への挑戦</a>	大川弥生	講談社	215p
	S4/21329		
「つくられた歩行不能」とは何か？車いすに頼る生活に陥ることなく、新しい能力と生き方を創り出す現代のリハビリテーションの考え方と方法を具体例で紹介する。			
<a href="#">認知症とは何か</a>	小澤勲	岩波書店	196p
	080/132/942		
「痴呆」という呼称が「認知症」に変更されることが決定された。これはどのような病、障害なのか、この病を抱える人たちはどんな気持ちで不自由な日常を生活しているのか。医学的立場から見た最新の知識を示すとともに、認知症者の手記や医者である著者自身のケア体験などから、ともしれば誤解されがちなこの病の真実に迫る。			
<a href="#">海馬：脳は疲れしない</a>	池谷裕二, 糸井重里	新潮社	344p
	S4/21341		
脳の「海馬」という部分についての研究に従事する、東京大学薬学部助手の池谷裕二と、『ほぼ日刊イトイ新聞』を主宰する糸井重里の対話の中から、「よりよく生きる」とこと「より頭をよくする」とことのつながりを探る。			
<a href="#">壊れた脳生存する知</a>	山田規敏子	講談社	254p
	S4/6602		
三度の脳出血、その後の後遺症と闘う医師の生き方。			

西本 裕 先生

<a href="#">デフ・ヴォイス：法廷の手話通訳士</a>	丸山正樹	文藝春秋	311p
	S9/22565		
<b>先生からの推薦文</b> 医療の現場では様々な障害を持った人と接する。この世界に入るきっかけとして、あるいは入った後に関心を持って、障害者を描いた小説やドラマを見ることがあると思う。その中では「障害者はかわいそう」、「でも頑張っている」という視点で描かれていることが多い。 しかし聴こえない人々は自らを「ろう者」と称していて、人々には誇り高い「ろう文化」の世界がある。「聴者」の世界と両方を知る人は少なく、そこに多くの葛藤がある。本書は意外に知られていないこの葛藤に気づかせてくれる。サスペンスの要素もあって楽しめる一冊でもある。			

<a href="#">スポーツと遺伝子ドーピングを問う： 技術の現在から倫理的問題まで</a>	森岡正博, 石井哲也, 竹村瑞穂	発行所	248p
	780.19/24		
<b>先生からの推薦文</b> 私は、スポーツドクターとしてアンチ・ドーピング研修の講師を引き受けることもあるのですが、本書の帯には「金メダリストを作るためのいったい何が問題なのか？」という問いが示されていて手に取りました。 総説の中の一節です。 「遺伝子ドーピングがなぜ悪いのかをあらためて考えてみると、それほど簡単に答えが見つかるわけではないからだ。(中略)さらに、アルツハイマー病の発症予防のために、遺伝子操作の手法が使われるようになるかもしれない。これは予防であるから、まだ健康な段階の人にその技術を用いるわけである。そのような時代がやってきたとしたら、健康な人々に対して遺伝子操作の技術が使われるに、なぜアスリートの能力増強に関してはそれが使えないのかという話になってくるはずである。」 本書のPARTⅢは「生命の尊厳と哲学」です。そこでは日常的な例を示して簡単には答えの出ない問題に対して考えるきっかけを与えてくれます。			
<a href="#">異文化理解</a>	青木保	岩波書店	222p
	080/132/740		
IT、グローバリズムが進み、接触・交流が拡大した「異文化」を私たちは理解しているだろうか。異文化の間での衝突はいまなお激しい。また、ステレオタイプの危険性や、文化の画一化がもたらす影響も無視できない。文化人類学者としての体験や知見を平易に展開しながら、混成化する文化を見据え、真の相互理解の手掛かりを明示する。			
<a href="#">20歳のときに知っておきたかったこと： スタンフォード大学集中講義</a>	ティナ・シーリグ著；高遠裕子訳	阪急コミュニケーションズ	231p
	S1/3655		
「決まりきった次のステップ」とは違う一歩を踏み出したとき、すばらしいことは起きる。月並みな考え方を覆し常識を疑い、新しい視点で日常の困難を見つめ直すことを、起業家精神とイノベーションのエキスパートが伝える。			
<a href="#">完全な人間を目指さなくてもよい理由： 遺伝子操作とエンハンスメントの倫理</a>	マイケル・J・サンデル著；林芳紀, 伊吹友秀訳	ナカニシヤ出版	194p
	490.1/22		
遺伝子操作やスマートドラッグ、ドーピングは悪か？ 人間の身体増強への欲望は正義か？ 政治哲学者・サンデル教授が、遺伝子増強の倫理に関する問題について熱く語る。			

## 長谷川 文 先生

<a href="#">ボクはやっと認知症のことがわかった： 自らも認知症になった専門医が、 日本人に伝えたい遺言</a>	長谷川和夫, 猪熊律子	KADOKAWA	222p
	916/85		
<b>先生からの推薦文</b> 『ボクはやっと認知症のことがわかった』は、認知症の専門医かつ『長谷川式簡易知能評価スケール』開発者の長谷川和夫氏自身が、認知症になり、当事者として感じたことや分かったことを私たちに伝えてくれる書である。春日井市出身の長谷川氏は、認知症と向き合い続け、「痴呆」から「認知症」への用語変更にも関わり、日本における認知症の歴史と共に歩んできた。 認知症となっても、人間として連続しており人が変わるわけではないこと、1日の中でも調子にグラデーションがあり固定的なものではないことなど、当事者からみる認知症を長谷川氏は伝えてくれる。また、家族や介護者が、認知症の方に安心を与えるような関わり方について具体的な提案もなされている。 作業療法士も認知症の方と関わる機会があるため、一読しておきたい書である。			



埴 杉子 先生

<a href="#">「東大」「ハーバード」ダブル合格16倍速勉強法</a>	本山勝寛	光文社	271p
	S3/22568		
<b>先生からの推薦文</b>			
<p>本書を推薦する理由を3点お伝えしたいと思います。まず1点目に、著者である本山勝寛氏の人生ストーリーについてです。本山氏は親が家にいない極貧バイト生活を送りつつ、塾や家庭教師にも頼らず独学で東京大学に現役合格。その後、英語は全くできないところから教育をより広い視野で研究するためハーバード教育大学院へ留学。その後日本財団でパラリンピックサポートセンターのディレクター、子どもサポートチームリーダー、人材開発チームリーダーを歴任。親に頼れない子供達のための居場所を提供しながら勉強をサポートするなどの活動を行う5児のパパ。この著者の行動力や実行力の高さが魅力的です。2点目に、勉強法について本気で書かれた本です。私は学生の頃は勉強にムラがあり、効率が悪い勉強法をしていました。そのため、本書の「<b>「地頭」×「戦略」×「時間」×「効率」＝勉強成果</b>」について知った時になるほど〜と思いました。少しでも今より勉強成果を出したい学生さんにはお勧めです。そして最後に、本書の読みやすさです。手におさまりやすいサイズで、すらすらとすぐに完読できます！</p>			
<a href="#">×くん (バツくん)</a>	坂野春香	三恵社	1冊(ページ付なし)
	購入準備中		
<b>先生からの推薦文</b>			
<p>著者は小学6年11歳の時に、悪性脳腫瘍を発症し、その後6年の寛解期間を経て、17歳で再発する。2度目の手術を受けた後は、右半身麻痺と失語症の障害を負う。そして再発から1年後、再々発し治療困難となり、2020年12月に18歳で旅立つ。漫画家を夢見て絵を描き続け、右手が不自由になっても、利き手を左手に変えて、亡くなる1ヶ月前に、完成させた絵本。絵本を通して、著者のメッセージが多くの人の心に届くことを願っています。</p>			
<a href="#">アドラー100の言葉：なりたい自分になるための心得</a>	和田秀樹監修	宝島社	223p
	S1/22708		
<p>性格は死の1日前まで変えられる。フロイト、ユングと並ぶ心理学の三大巨頭、アドラーの名言集。現代人の心に刺さるアドラーの言葉100を、短い解説文でレクチャーする。</p>			
<a href="#">作業療法の曖昧さを引き受けるということ</a>	齋藤佑樹解説/上江洲聖 原作/えんびつマンガ・ 本文イラスト	医学書院	237p
	S4/23121		
<p>作業療法は個性が高く、どんな強固なエビデンスに基づいていたとしても、選んだ道が確かであるとは言い切れない——本書は、常にゆらぎのある臨床の最前線で、その曖昧さを引き受ける覚悟を決め、真摯に対象者との協働実践を続ける作業療法士に向けた新時代の羅針盤です。</p>			
<a href="#">地域作業療法ガイドブック 子ども編</a>	小林隆司監修；佐々木将 芳ほか編著	クリエイツかもがわ	228p
	購入準備中		
<p>作業療法士が子どものすべての分野で活躍する時代が来た！「学童保育×作業療法士」から始まった地域連携のムーブメント！いまや保育所・幼稚園、特別支援教育だけでなく通常学校、通信制高校にも、児童館、放課後等デイサービス、自立支援ホーム、地域おこし協力隊……豊富な実践事例をガイドに、あなたも「地域作業療法×多職種連携」に取り組もう！</p>			

藤田 高史 先生

<a href="#">PT・OTのためのこれで安心コミュニケーション実践ガイド, 第2版</a>	山口美和	医学書院	224p
	498.14/174		
<b>先生からの推薦文</b>			
<p>作業療法士、理学療法士の学生の皆さんは、臨床実習場面でどのようにリハビリテーションが必要な方(児)に接したらよいのか、指導者の方とどうしたら円滑なコミュニケーションを取ることができるのか、今から不安や期待を抱いているのではないだろうか。そんな皆さんにこの本をお勧めしたい。コミュニケーション力向上には自分自身を見直すことが必要であることを知る機会になり、同時に臨床実習はもちろんのこと、就職してからも役立つ知識や実践力を得ることができるだろう。</p>			

<a href="#">高次脳機能障害リハビリテーションの流れが見える</a>	下田信明, 高杉潤編		
<a href="#">リハの流れが見える</a>	493.73/183		
<b>先生からの推薦文</b>			
<p>これまでリハビリテーション(リハ)職向けの高次脳機能障害リハについて解説した書籍はいくつかみられてきた。しかし、本書のように各症候の説明や検査、評価方法にとどまらず、病棟内での高次脳機能障害リハから退院に向けて、さらにその先の居宅生活を見据えたリハまでを一連の流れで解説した書籍は初めてではないだろうか。また、総論で高次脳機能障害リハに関するエビデンスについて触れているのも良い。</p> <p>そのような意味で、本書は基本的な高次脳機能障害について学んだあとに、リハビリテーション職として就職する前、あるいは長期の臨床実習に出る前に手に入れておきたい一冊である。</p>			
<a href="#">老いと記憶：加齢で得るもの、失うもの</a>	増本康平	中央公論新社	206p
	S1/22574		
<p>屈指の高齢社会である日本では、老化への関心も高い。加齢に伴って人間の記憶や認知はどう変わるのか、それらを司る脳にどのような変化が生まれているのか、そして、変化する記憶機能といかに向き合うべきか。加齢をネガティブにばかり捉えず、正しい知識で向き合うための一冊。</p>			

## 山鹿 隆義 先生

<a href="#">幸せのメカニズム：実践・幸福学入門</a>	前野隆司	講談社	257p
	S1/22665		
<b>先生からの推薦文</b>			
<p>作業療法は作業をもちいて人を幸せにできる治療法です。</p> <p>本書では、良く生きることや、well beingとは何なのかについての記載があり、自分の幸せや他人の幸せについて考える機会になると思います。</p> <p>また、本書で紹介されている、幸せに関連する因子やどう行動したらよいかなどは、作業療法士として、どんなことを大切にして、支援を行ったらよいかの大きなヒントになると思います。</p> <p>本書を読んで、自分も他人も幸せにできる作業療法士に是非なってください。</p>			
<a href="#">エッセンシャル思考：最少の時間で成果を最大にする</a>	グレッグ・マキューン著 ；高橋璃子訳	かんき出版	307p
	S3/22528		
<p>エッセンシャル思考が目指す生き方は、「より少なく、しかしより良く」。</p> <p>そのためには、ものの見方を大きく変えることが必要になるが、時代はすでにその方向へ動きだそうとしている。</p>			
<a href="#">「脳コワさん」支援ガイド</a>	鈴木大介	医学書院	212p
	493.73/179		
<p>会話がうまくできない、雑踏が歩けない、突然キレル、すぐに疲れる……。病名や受傷経緯は違っていても、結局みんな「脳の情報処理」で苦しんでいる。高次脳機能障害の人も、発達障害の人も、認知症の人も、うつの人、脳が「楽」になれば見えている世界が変わる。それが最高の治療であり、ケアであり、リハビリだ。疾患ごとの〈違い〉に着目する医学+〈同じ〉困りごとに着目する当事者学=「楽になる」を支える超実践的ガイド！</p>			
<a href="#">作業療法に役立つ臨床推論：高次脳機能障害の生活障害を分析する推論思考過程の理解</a>	酒井浩, 宮口英樹, 横井賀津志編	三輪書店	317p
	493.73/175		
<p>OT臨床推論入門に最適な一冊！最近よく耳にする臨床推論って何ですか？臨床場面でどのように実践するのでしょうか？患者さん利用者さん支援へどう活かせばよいですか？生活障害の科学的分析から生まれるオーダーメイドな作業療法。</p>			
<a href="#">作業療法士になろう！</a>	斎藤さわ子	青弓社	220p
	498.14/183		
<p>作業療法のやりがいを通して仕事の魅力を伝え、作業の治療的パワーと作業療法の社会性を確認し、病気やけがからの回復を促進して健康的で主体的な生活に導く作業療法士になれるようにガイドする。これからめざす人だけではなく、すでに作業療法士になっている人も自分の作業の知識と技術をみがくことができるように実践的に解説する。</p>			

山下 英美 先生

<a href="#">だから、作業療法が大好きです!</a>	葉山靖明	三輪書店	110p
	494.78/165		
<b>先生からの推薦文</b> 脳卒中発症後、作業療法と出会いその魅力に感動し、作業療法をやりたいとの思いでデイサービスを立ち上げた、自称“OTファン”の著者による1冊です。 自身の経験に加え、デイサービス利用者が作業療法士とともに「意味のある作業」に取り組む姿を通して、「その人らしさ」が引き出されていく様子が具体的に描かれており、作業療法の醍醐味を味わうことができます。さらに、作業療法士からの視点も紹介されており、作業療法士の思考過程を知ることができる点も魅力です。作業療法士を目指す皆さんに是非お勧めします。			
<a href="#">「作業」って何だろう：作業科学入門 第2版</a>	吉川ひろみ	医歯薬出版	178p
	494.78/149		
生活全体が「作業」によって変化していくことに注目する「作業科学」について解説。さらに作業科学と作業療法との関係、将来展望についても述べる。作業科学学術誌掲載論文(概要)も収録。			
<a href="#">女性作業療法士の子育て・介護・仕事：アクティブ・ワークライフバランスの方法</a>	宇田薫	青海社	133p
	498.14/182		
育児・家事・介護を仕事と両立しようとしている女性作業療法士が悩みを打ち明け、それに対して他の作業療法士が助言や励ましを送る。			
<a href="#">おでかけは最高のリハビリ!：要介護5の母とウィーンを旅する</a>	たかはたゆきこ	雷鳥社	287p
	S9/21485		
脳出血に倒れ要介護5になった元バイオリン教師の母と、40代独身無職の私が「人生を楽しむ」をモットーに、音楽の都ウィーンをめざした怒濤の3年間。介護ブロガーの著者が、その計画・準備・道中のすべてを綴る。			
<a href="#">認知症の私からあなたへ：20のメッセージ</a>	佐藤雅彦	大月書店	61p
	S9/21486		
認知症になっても、人生をあきらめない51歳のときにアルツハイマー病と診断されながら、知恵と工夫で一人暮らしを続けてきた著者による、勇気と励ましに満ちたメッセージ。			

